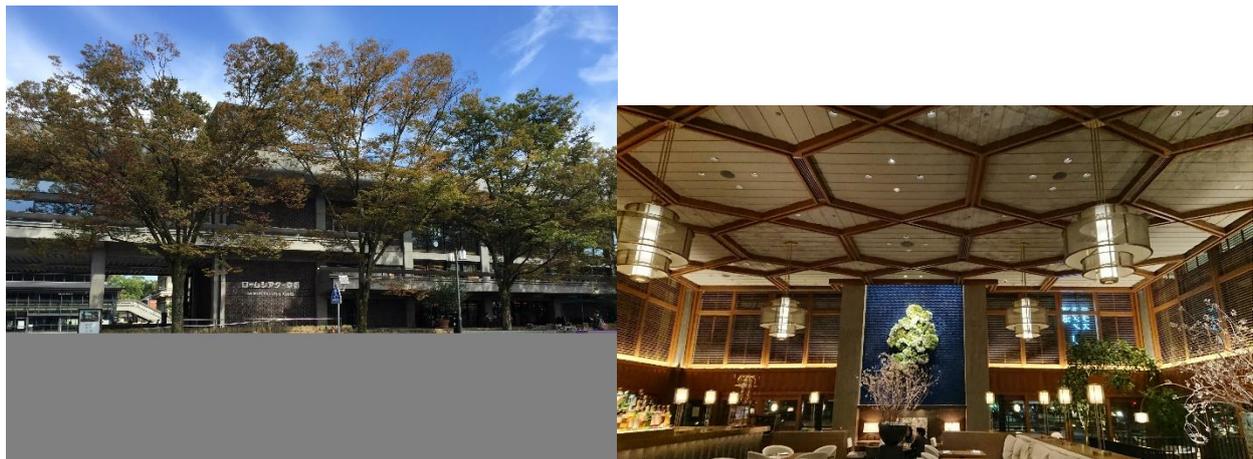


第60回 建築士会全国大会 京都大会

12月7日（木）、釧路空港9時15分発の飛行機に6名（金子 ゆかり、須藤志津子、多田 さおり、山岡将俊、山崎 景子、香川 博）が乗り込み、伊丹空港へ出発。羽田空港から伊丹空港へ乗り継ぎ、京都市内についたのが午後3時30分。その後、安藤忠雄設計の「京都府立陶板名画の庭」を見学しました。この建物は平成6年3月に完成し、陶板版画8点が展示されています。



その後、「ロームシアター京都」に行きました。この建物は、昭和35年に開館した前川國男設計の「京都会館」を改修・改築した建物で、平成28年1月にリニューアルオープンしましたが、この建物の2階のレストラン「京都モダンテラス」は前川國男のモダニズム溢れる空間を観ることが出来ます。そこでは、ワインと簡単なオードブルをいただきました。



その後、その日の宿泊先の「柊（ひいらぎ）家別館」にて京懐石とおいしい地酒の夕食をいただいて就寝。

タクシーの運転手も言っていましたが、柗家は、文政元年（1818年）に創業した、京都でも有名な高級旅館だそうで、京都老舗旅館御三家の一つだそうです。

他の二つの旅館は、俵屋（たわらや）旅館と炭屋（すみや）旅館です。

私達が泊まったのはリーズナブルな値段の柗家別館でしたが、相当古い建物で、2階の足音が聞えたり、廊下の床が少し傾いていてきしむ音がしたり、お風呂が小さかったりしましたが、料理とサービスは素晴らしかったです。また泊まりに行きたい旅館でした。



12月8日（金）は、京都市勧業館「みやこめっせ」にて今回の第1の目的である各合同セッション、記念フォーラム、大会式典、に参加。



午前 10 時から始まった合同セッションは、男性陣は「街中（空き家）まちづくり部会・歴史まちづくり部会、女性陣は「女性委員会+福祉・まちづくり部会」にそれぞれ分かれて参加しました。午後 12 時 45 分から始まった記念フォーラムは、「山とまちと木造建築」と題して、3 人の方々によるリレースピーチが行われました。

午後 3 時から始まった大会式典は、広い会場にも関わらず立ち見も出るほどの熱気の中、番匠保存会による古式ゆかしい儀式「鉦始め（ちょうなはじめ）」や素朴で味わい深い「木遣（きやり）」によるオープニングによって、4 千名の会員が参加しておごそかに始まりました。



その後は挨拶や表彰式等が行われ、次期開催地「埼玉県」の紹介とアピールで終了となりました。内容等につきましては、建築士会の冊子を見ていただきたいと思います。

12 月 9 日（土）は、地域交流見学会（エクスカーション）でしたが、何と 18 コースもありました。（さすがに京都は見所がいっぱいあります）

私は、「千利休が愛した北山杉とお寺で癒し体験（小説『古都』ゆかりの地散策）」の C コースに参加しました。大型バス 1 台に約 40 名の参加者が乗りこみましたが、バスの中での自己紹介の場で、函館大会をアピールしたのですが、お蔭様でいろいろな人から函館の事を聞かれました。

コースの内容を簡単に説明しますが、最初に訪ねた日蓮宗京都八本山の一つである「立本寺（りゅうほんじ）」では、住職の手ほどきによる写仏の体験をし、次に、御室桜や五重塔、二王門で有名な真言宗御室派総本山で世界遺産の「仁和（にんな）寺」の見学と昼食、

次に、真言宗御室派別格本山の「蓮華（れんげ）寺」では子供達による御室太鼓を鑑賞しました。



そして最後の目的地である北山杉の里「中山地区」を見学しました。

初めに「京都北山杉の里総合センター」で使用事例の説明を受けた後、杉林での枝打ち作業や北山台杉の見学、木造倉庫群や中山地区の集落を散策し、丸太磨きも実際に体験することが出来ました。



コース名が川端康成の小説「古都」ゆかりの地とありますが、捨子ではあったが美しく成長した老舗呉服商の一人娘である主人公の千恵子の生き別れた双子の妹、苗子が働いていたのが北山杉の里ということでした。

ちなみに、川端康成の京都での定宿は、柊家（ひいらぎや）だったそうです。

※参考

この滝の上流2 kmくらいの所に赤砂（あかご）山という砂の多い山があります。雨が降るたびに、砂が谷に流れ出し菩提の滝まで流されます。その流れている間、砂は角が取れて丸くなります。そして滝つぼへ……ここで更に丸太を磨く「菩提の滝の砂」も磨かれるのです。滝つぼに落ちた砂は周りや下流に溜まります。それを「水こし」（水の中で細かいものだけを選ぶ）して集めた砂が「菩提の滝の砂」です。石英質を含まず、角が取れて丸くなった砂はすぐつぶれて泥状になり木の肌を痛めにくいのです。更に！検査に出したところ、トノコと同じ成分を含んだ砂が数多いのです。

磨き丸太の加工・乾燥・保管を目的として建てられた木造倉庫群は、何れも昭和10年頃に建てられたために、独特の外観と構造を持っており、木造建築学上でも貴重な建物とされています。また、建物の外部には、丸太を砂で磨くための洗い場である池が必ず備わっ

ているそうですが、現在は他の場所を使用しているため、これらの倉庫群は使われていないそうです。また、北山台杉とは、1本の台木より、数本から数十本の幹を成長させて小径の丸太を生産する古来より北山地方で行われている施業法だそうです。

北山杉の歴史は、室町時代から始まり、600年以上にもなるそうです。この北山杉を加工した北山丸太は「茶の湯」文化を支えた茶室や数寄屋の建築材料として煩雑に用いられるようになり、桂離宮や修学院離宮等は、北山丸太を使った数寄屋造りの代表的な建物です。